

SHOW-HIVE シネマルーム



Data
監督・脚本:チャン・フン
原案・製作:キム・ギドク
出演:ソ・ジソブ/カン・ジファン
/ホン・スヒョン/コ・チャ
ンソク/ソン・ヨンテ/チャ
ン・ヒジン/ハン・ギジュン
/パク・スヨン

みどころ

鬼才キム・ギドク監督の下で修行を積んだ若者が、師匠とは一味違う怪作を！ヤクザより暴力的な映画スターV S映画俳優の夢を捨てきれないヤクザに、なぜ人生の接点が？また撮影現場で2人のガチンコ対決が始まったのは、一体なぜ？静と動の対決は女性を巻き込み、あるヤクザ抗争を経ながらクライマックスへ！観客動員はオーケー。他方、ギドクが自負しているという、面白さや質の点、そして仕上がりは？ちなみに、あなたはスタ派？それともガンベ派？

あなたはスタ派？ それともガンベ派？

韓国には2大青春スターが力と力、技と技、そしてまた個性と暴力をぶつけ合う映画が多いが、これもその1本。そのうたい文句は「ヤクザより暴力的でプライドが高い“映画スター”スタVS映画俳優の夢を捨てきれない“ヤクザ”ガンベ」というもの。だが、なぜこんな2人の人生に接点が・・・？

『インファナル・アフエア / 終極無間』の評論で、私は「あなたはヤン(トニー・レオン)派？ それともラウ(アンディ・ラウ)派？」と質問したが(『シネマルーム7』223頁)同じように私は本作で「あなたはスタ派？ それともガンベ派？」と質問したい。とは言っても、スタを演じるカン・ジファンもガンベを演じるソ・ジソブもまだまだ発展途上の若手俳優だから、「韓国トップスターW主演」というのはちょっと言い過ぎ。また、そこまで二者択一を迫る必要はないかもしれないが、そういうギリギリのせめぎ合いの中で好みを確定させることも、たまには必要では？かという私は、断然ガンベ派！



(C) 2008 SPONGE AND KIM KI-DUK FILM. ALL RIGHTS RESERVED

面白さや質は？ そして仕上がりは？

多分あなたはキム・ギドク監督を知っていても、この映画のチャン・フンという監督は知らないはず。チャン・フンは世界中から異才・奇才と賞賛されているキム・ギドク監督の撮影現場で、映画づくりを一から学んだ1975年生まれの若者。そんな彼がキム・ギドクの原案に自ら脚色を加え、今回監督デビューを果たしたわけだが、キム・ギドク監督作品と同じような低予算映画でありながら韓国で140万人以上を動員する大ヒットとなり、韓国映画評論家協会賞では新人監督賞を受賞したらしい。

今回はじめて製作に回ったキム・ギドクは、キネマ旬報2月上旬号で「韓国で僕が受け入れられるようになったといっても、やはり初期の頃の悪いイメージが払拭されたわけではないので、資本作りのためにも「僕の名前が出ない僕の作品」を作っていこうと思っているのです。」と語っているが、そのココロは？また、取材をした塚田泉氏は「『僕の監督作では国内で10万人以上の観客は動員できないだろう』として変わらぬわが道をゆく一方で、『多くの観客を動員できるような映画作り』にも挑むようになったのだ」と分析しているが、さて「多くの観客を動員できる映画作り」とは？それに対して彼は、「動員できる作品」といっても、いわゆる商業映画とは違い、おもしろさや質の点では責任を持ってアプローチしています。仕上がりは自負していますよ」と語っているのは心強い。

キム・ギドク監督の元で助監督を務めてきたチャン・フンの監督初作品が観客を動員しているのは確かだが、さて、面白さや質の点、そして仕上がりは？

なぜホンモノのヤクザに出演依頼を？

『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）や『王の男』（06年）など、劇中劇映画には面白いものが多いが、タイトルからして本作は、いかにも劇中劇映画。

それまで順調だった、ボン監督（コ・チャンソク）によるスタ主演のアクション映画の撮影が今行き詰まっているのは、監督からアクションのリアルさを求められるスタが共演者を本気で殴りつけ大ケガをさせてしまったため。これにはスタのファンもキレてしまい、見舞いを終えて出てきた病院の前でスタはファンから卵をぶつけられる始末。映画はつくりもの！しかしアクションはリアルに！そんな二律背反的要求を満足させるのはどだい不可能・・・。

誰でもそう思うはずだが、共演者が誰もいなくなったスタが思い出したのは、あの日高級クラブで顔を合わせ、サインをもらいにきたホンモノのヤクザ、ガンペ。あの時の話では、ガンペは昔端役で映画に出ていたらしい。当然暴力はお手のものだから、このアクション映画の俺の相手役にあいつならピッタリ。そう思ったスタはボン監督を差し置いて勝手にガンペに対して出演依頼に臨んだが・・・。

俳優業は意外に難しい？

この映画は、冒頭に高級クラブでガンペが女優のカン・ミナ（ホン・スヒョン）とすれ違ったことから、人気スターのスタが別室に来ていることを知り、ガンペがスタのサインをもらいに行くというシークエンスからスタートする。それが2人最初の「対決」になるから、それに注目！ホンモノのヤクザを前にしてスタがビビらないのは、スタにも多少腕に自信があるためだが、「短い人生、ムダにするな！」とカッコいいお説教をしている姿をみると、やはりヤバイ。そこで、ぐっとガンペが我慢したのは一体なぜ？また、スタから出演依頼を受けたガンペが、アクションシーンはガチンコで闘うことを条件としてオーケーしたのは一体なぜ？そこらあたりがこの映画のミソだから、じっくりと味わいたい。

しかして、素人俳優の起用、ましてやホンモノのヤクザの起用に難色を示すボン監督がスタが説得して撮影が始まったわけだが、殴り合いのアクション前の追っかけこなどのアクションシーンで意外にガンペは苦戦。いくらケンカが強くて、あんなに酒とタバコばかりの生活をしていたら体力が低下しているのでは？という私の心配が当たったわけだ。しかしここで弱音を吐いたのではヤクザの名がすたる。とばかりにガンペは懸命に俳優業にのめり込んでいったが、俳優業は意外に難しい？

大スターには女性問題の悩みが

スタほどの人気大スターともなれば、女性問題についてマスコミの追跡への用心が大切。共演者に対しては無茶なアクションをするスタだが、その方面への用心は怠りなく、恋人のウンソン（チャン・ヒジン）とは車の中で密会し、室内灯もつけずにただひたすらエッチに励むだけ。スタはそれで十分満足のようなのだが、それでは女から不平不満が出るのは当然。顔も見せられないようなエッチはもうイヤ、喫茶店で会うこともできない恋人関係もイヤと言い出し、「それが変わらないのなら、もう会わない」と宣言したからスタは困惑気

味。「女はいくらでもいるサ」と思っているものの、会えなくなるとかえって話したくなるもの。撮影所の悩みを抱えている時などなおさらだ。

そんなある日、2人の密会現場を盗み撮りしたビデオが送りつけられてきたから大変。スタのマネージャーであるイ室長（パク・スヨン）が脅迫者たちとの折衝にあたったが、金額をつりあげてくる脅迫者たちに対するスタのアイディアは、ホンモノのヤクザであるガンペを使うこと。そんなことをしたらかえって事態はやバくなるのでは？また、スタのために一生懸命尽くしているように見えるイ室長の言動も、どこか怪しげだが・・・？

女に対する姿勢も好対照？

女に対する誠実性の無さが目立つ（？）スタに対し、ヤクザのガンペは女に対しては意外とウブ？どうもガンペは一目会った時から女優のカン・ミナにホレたようだが、ヤクザの自分が堅気の人に手を出してはダメだとわきまえている点はえらい。しかし、アクションにリアルさを求めるのなら、強姦だってリアルに、とばかりに、共演者ミナの強姦シーンではホントに姦ったようだが・・・？

しかし、ミナが一人海の中へ入っていくシーンを撮影ではなく本気だと錯覚したガンペは、その救出のため猛然と海の中へ入って行ったから、せつかくの撮影はおじゃん。しかしこれによって俄然ミナのガンペに対する愛が深まったのは当然。女に対してどちらが誠実かの判定は難しいが、スタとガンペはこんな風に女に対する姿勢も好対照。

ペク会長とパク社長の確執は？

ガンペのボスであるペク会長（ソン・ヨンテ）は今収監中の身で、裁判に向けて弁護士といろいろ打ち合わせ中。ガンペとの面会中にガラスに書いた碁盤上で囲碁対局というのはあまり見ない風景だが、雑談めいた会話の中でペク会長は情報を収集しているようだ。今日の面会におけるペク会長のガンペに対する含蓄ある言葉は「下の奴らをあまり信じるな」だが、そのココロは？

トップが収監されるとナンバー2が裏切り、組織の乗っ取りを狙うという構図はよくあるが、それを狙っているのがパク社長（ハン・ギジュン）、ある日ペク会長の自宅に泥棒が入り、裁判での有罪を根拠づける証拠が盗まれたから大変。こりゃ一体誰の仕業？そりゃ、パク社長に決まっている。そこでペク会長がガンペに下した命令は「殺れ！」。ペク会長への忠誠を誓っているガンペが速やかにその命令を実行したのは当然。ところが、縛り上げて顔を覆い、カッコ良く「あの世への旅費を」と言ってパク社長のポケットに数枚のお札を入れて海に沈めようとした時、ガンペはなぜか「遠くへ行け。死人として生きろ」というスタの台詞を。こりゃ一体何ゴト？ヤクザと俳優の二足のわらじを履いているうち、いつの間にかガンペの人間性が変化してきたの？

海外に追放され、二度と現れないはずのこのパク社長が映画後半大きな役割を果たすか

ら、この事件後もバク社長の言動に注目。

映画づくりはチームワークが大切！

映画づくりのボスは監督だが、資金集め、キャスティング、ロケ地選定、また撮影のための照明、衣装、美術から大道具、小道具に至るまで映画づくりにはチームワークが何よりも大切。ボンが執念を燃やして監督しているこの映画はスタの相手役不在によって1度は挫折しかけたが、今は俳優業も板についてきたガンペの熱演のおかげ(?)で、撮影は絶好調。あとはクライマックスとなる、2人の対決シーンを残すのみ。

そんな状況下、ガンペがいきなりスタの相手役を降板すると言い始めたから大変。これは、ガンペがヤクザとして命を懸けてやらなければならない任務が急浮上してきたためだが、もちろんそんな事情をぐだぐだと説明するガンペではない。なぜなら、民間会社ではコンプライアンスが、医師と患者の間ではインフォームドコンセントが不可欠だが、ヤクザには「説明責任」という概念は存在しないから。

ガンペのこんな態度にボン監督もスタもブチ切れたのは当然。しかしミナからの「途中で投げ出すのは良くないわ」などという常識的なお説教にガンペの決心が揺らくはずもない。さあこれでは、せっかくの快心作も途中でお蔵入りになってしまうこと確実だが……。

そこまでやるか！これぞ韓流アクション！

キム・ギドク監督作品は概ね90分と短いのが特徴だが、チャン・フン監督初作品は113分とそれに比べれば長い。しかしガンペとスタの対比の妙が見事だし、テンポ良くストーリーが切り替えられていくから、時間が経つのはあっという間。つまり、それだけ観客はこの映画の面白さに引き込まれているということだ。

本作のクライマックスは、干潟を舞台とした泥まみれになっての対決シーン。「主役は最初にいったん負けるが、最後には勝つ。映画のストーリーはそう決まっている」とスタは言っていたが、「ファイトシーンではガチンコ対決」と約束した以上、最後の対決での勝利者は監督にもわからないようだ。撮影現場でのアドリブは結構あるらしいが大みそか恒例となったK-1グランプリではないのだから、俳優の強さによって勝者が決まるなどという、筋書きのない映画づくりってホントにあるの？

「ある事情」によって再び撮影現場に現れたガンペの挑発に乗る形でスタとのクライマックス対決が実現したが、それは「そこまでやるか！これぞ韓流アクション！」と絶賛できる内容。これにはチャン・フン監督も大満足だ。ガンペの俳優業が次第に上達したのと同じように、スタも格闘技上達のためハードなトレーニングを積んだようだから、さて最終対決の勝者はガンペ？それともスタ？そんな手に汗握るクライマックスシーンは、あなた自身の目で。

2009(平成21)年2月14日記